



トップの表情が運命変える 黒四工事、極限での教訓

ささ じま のぶ よし
笹島 信義

〔笹島建設会長〕

岩の割れ目から吹き出してくる地下水は、時として消防車の放水並みになる。それでも、作業員たちは水温4度の水に膝や腰まで浸かりながら、土砂をかき出し続けました。「黒四」の名で知られる黒部川第四発電所の工事で、ダム建設の資材や機械を運び込むトンネルを作る難工事に携わった時のことです。私は熊谷組の下請けで作業の第一線に立つ「笹島班」の班長、つまり現場監督を務めていました。

岩盤にドリルで同時に複数の穴を開け、そこに詰め込んだ火薬を爆発させて土砂をかき出す。その繰り返しで掘り進む工法は、1956年当時、最新のものでした。全長約5.4kmの1.7km地点で我々の前に立ちふさがったのが「破碎帯」と呼ばれる断層部分です。岩

盤は碎けて細かい石になり、地下水をたっぷりと含んでいる。掘ったそばから崩れてくるので、思うに任せない。破碎帯までは1日10mも進んでいたのが、5月からの1カ月半で1.7mしか進めなくなりました。

進まない工事。急に水が出て、目の前で作業員が5mも水圧で飛ばされる。寝るのは保安帽をずらしてかぶったままの仮眠ばかり。そんな先の見えない日々を送っていれば、気も滅入ってきます。私は現場の指揮官として、弱気な言葉は口にしませんでしたが、表情には出ていたのでしょう。

「水が出た」という一報を聞きつけて、熊谷組の専務が黒部に駆けつけてきました。トンネルの神様と言われた人です。止めどなく流れ出てくる水を見て、最初は絶句していたのですが、

現場を離れると私に向かって言いました。「おまえの顔を見ると陰気くさくてダメだ。そんな顔をしていると、作業員の士気に関わる。人間にやれることには限界があるが、神様ならできる。まして、この事業は天下の関西電力が社運をかけて挑戦しているんだぞ」。

この瞬間、肩の力がすーっと抜けていくのを感じました。できる、できないではなく、リーダーはいかにやり遂げるかを考えればいい。あとは神様が決めることだと割り切れたのです。

トンネル工事が破碎帯で難航していることは、当時、新聞などで散々書き立てられ、計画を立てた関電もやり玉に挙がりました。関電の太田垣士郎社長(当時)が視察に来られたのはそんなさなかです。大会社の社長が水に浸かりながらトンネルの先端まで来て、ひとしきり様子を見た後、私に「どうかね。掘れるかね」と尋ねました。私は「何とかなるでしょう」とだけ答えました。

この時、実は、私は思わぬ来訪者にふてくされていたのですが、周囲に言わせると表情が明るかったそうです。熊谷組の専務に叱られて、腹が据わった直後だったのが幸いでした。

その後も太田垣社長の強い意向で工事は続行されました。後に聞いた話ですが、太田垣社長は、最前線で働く作業員たちの明るい表情を見て、「きっと大丈夫だ」と確信したそうです。

膠着状態のままお盆が来て、1400人にも上る作業員たちは故郷へと帰っていきました。労働契約もいったん解除するので、こんな極限状態に戻ってくるのは3割いればいいと思っていました。しかし、難工事も意気に感じて、こんな現場監督を盛り立てようと思ってくれたのでしょう。お盆明けには作業員の7割が戻ってきた。トンネルが完成した時よりも、間違いなく一生で一番うれしかった瞬間でした。(談)